

巻頭言 「石の感謝」

宇野 元

たしか、画家のミロが語っていたと思います。ピカソは道端の石ころを拾ってズボンのポケットに入れていた。……記憶があいまいです。もしかしたら、ピカソではなく、ミロ自身、あるいは、彫刻家ジャコメッティのことだったかもしれません。三人の誰にもよく合う逸話だと思います。

特別な石ではないでしょう。道端にころがっている石。少年時代、学校の帰りに蹴飛ばしながら歩いたものです。そんな、なんでもない石ころが拾われる。どんなひらめきによるのか、どんな判断が働くのか、興味をそそられます。歩いていた足をとめ、腰をかがめて見つめ、にんまりし、ひょいとズボンのなかのコレクションに加える。そんな様子が浮かびます。

私たちが石ころだった。それを、いったいどんなご判断によるのか、神が拾い上げてくださいました。改革派教会は、これを「選びによる」と言いあらわしてきました。この表現は、計り知れない恵みをおぼえ、神に栄光を帰するものです。私たちはこの表現によって、ファリサイ派的な特権意識を持つのではなく、神の憐みにたいする心からの感謝と、全幅の信頼を告白するものでありたいと思います。

さらに、拾われた石はポケットのなかに加えられる、そんなふうにして、ばらばらに存在していた私たちが、ひとつの家を形作るものとされる。路傍の石たちは、イエス・キリストをかなめ石とする霊的な家、すなわち神の家の部分になるという目的をもって集められます。

あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。ペトロの手紙一 2章5節

神はご自身の家の建設のために、私たちを用いてくださいます。このことについて第一におぼえたいと思います。イエス・キリストこそが生きた石であり、建物の要でいらっしゃいます(同2章4節)。私たちが生きた石と言われているのは、この方とのつながりにおいてです。私たち自身は命をもたない石だったのに、拾い上げられ、命あるものとされている。このことを喜びましょう。このことの驚きを胸にとどめましょう。神の家としての教会の建設は、かなめ石への感謝と信頼によってなされてゆきます。